

関係発達研究にかかる「間主観性」概念の現状と可能性
—子どもの自己形成過程における意味に着目して—

A Current Analysis on “Intersubjectivity” in Relational Developmental Study with a Focus on
the Process of Children’s Self-Formation

研究代表者 藤井 真樹 (D2)

教員 岡田 敬司

研究分担者 勝浦 眞仁 (D3)

山崎 徳子 (D3)

平野 拓朗 (D3)

〔研究目的〕

発達研究において「間主観性」という概念は、かつて自然科学的研究パラダイムに対する戦略的概念として用いられていたが、関係論が主流となってきた近年、もはやそれ自体が中核的なテーマとなりつつある。しかし、この概念の用いられ方はまだ曖昧である上、その内実には迫るものは少ない。

私たちのチームは、関係発達の観点の下、保育、教育といった各々の現場に赴き、そこで生きる実際の人々の具体的な関係性構築及びその在り様を明らかにするための方法論を構築する中で、関係性のなかで相互交流される「間主観性」そのものがどのように当事者の自己形成に影響を及ぼすかという具体的課題に向き合おうと試みてきた。そこで、本稿では、4人のメンバーがそれぞれのフィールドで得た事例から、幼児、発達障害児などの自己形成過程を描き出すことによって「間主観性」がどのような意味をもつのかについて、議論を行った。

〔研究経過〕

上記の研究目的の下、メンバーそれぞれが自らの発達研究領域での「間主観性」概念の現状を明らかにしつつ、実際に関わっている保育・教育現場における具体的な自他関係を描き出すことを通して、未だその実態について曖昧な感が否めない、関係発達研究における「間主観性」という概念に内実を与えるべく試みた。

また、これらについてメンバーはそれぞれ、第6回日本質的心理学会や第28回日本人間性心理学会などでポスター発表及び口頭発表を行い、様々な理論的背景をもつ各領域の諸氏と、学問的及び実践的観点から、この「間主観的」概念の意義や限界などについて議論を行った。

以下に、各メンバーが行った研究経過を紹介する。

藤井は、保育現場での関与観察を通して、身体的主体として生きる子どもたちの在り様に、周囲の他者との関わりを形成していく原初を感じ、まず彼らの「身体的主体」としての在り様の言語化を試みる。またこれを通して、不可視であるがゆえにこれまで取り上げられにくかった、人が実際に生きている水準での「情動」のもつ意味についてあらためて考え、子どもの自己形成過程における「情動」がいかなる働きを担うのかについて考察を行う。

勝浦は、学校教育の現場で、発達において何らかの影響を受けてきた子どもたちと関与しながら観察する中で起きた、興味深い2つのエピソードを提示する。これらのエピソードは、たやすく言語化することを躊躇わせるものであった。そこで、「今、ここ」で観察者が体感していたことを、スターンの間主観的母体の概念を援用しながら言語化し、発達障害児の体験世界を記述することを試みた。

山崎は、スターンやトレヴァーセンが示唆する養育者の応答性の重要性を理論的背景に持ちながら、自身が指導員として関わる障害児学童保育において、自閉傾向のある学童期の子どもが周囲の子どもたちを「友達」と呼んで関わるようになる過程を「内的他者」に着目することによって詳細に描き出し、その自己意識の変容について考察した。

平野は、学級での日常の生活における子ども、生徒たちの関わりを通した学びの過程を取り上げる。担任教師から示される「生徒像」に近づいていく過程ではなく、それを彼らがどのような意図や想いにおいて意味づけ、転換していくのかという過程から学びを捉える。そこで、学級での関わりにおける生徒の主観的な動態を記述すること、また記述するための関与観察者の視点を考察することを目的とした。

【研究成果】

以上のように本コロキウムでは、各メンバーがフィールドとしている実際の保育・教育現場における具体的自他関係を事例として取り上げ、「間主観性」という概念がもつ、子どもの自己形成過程における意味について考察を行った。今後も、さらに考察を深めていく必要があるが、現段階での示唆を以下にまとめる。

- ① 「間主観性」をそれとして同定し、自己形成における意味を探ることは、その過程に他者が必ず介在してくる現実を描くことが必要となり、自己理解と他者理解が絡み合って形成されてくる実態を描き出すことにつながる。
- ② 研究者が、人が生きる現場で行き交っている「間主観性」を主題化し描き出すことは、研究者自身にその場をアクチュアルな身体で生きることを求める。
- ③ 保育・教育の場で生きる者たちの「間主観性」を取り上げることは、行動観察の枠組みでは捉えきれなかった水準での実践者の「育てるまなざし」を掬い上げ、「育てる者」の営みを省察する契機となる。